

2019/08/26

「過疎化の現状と外国人の力と共生」講演会



今回は私（生きがい特派員 池谷 啓）がNPO法人楽舎（らくしゃ）理事長として講演を依頼されたので内容を報告する。

令和元年8月6日、森町文化会館にて「過疎化の現状と外国人の力と共生」をテーマに講演会が行われた。講演の対象は、周智郡森町と袋井市の町・市長と町長、市町会議員、そして行政職の人たち。およそ200名が参加した。

浜松市天竜区の春野町の過疎化の現状（10年で20～25%の人口減少率、1950年代の三分の一になっている現実）と、これまで定住促進事業に携わってきた事例を紹介した。

都会から田舎暮らしを求めて移住希望する人たちは多い。私も、9年前に40年の東京暮らしから、田舎暮らしを求めて春野町に移住した。その過程で、増える空き家と耕作放棄地と移住希望者を結びつけるという定住促進事業を続けてきた。その成功例や失敗例の紹介した。

そして、今年、インドネシア家族8名の、ハラール食品加工場さがしのサポートの事例の紹介。ハラールとは、イスラム法上で食べることが許されている食材や料理を指す。とくに豚肉を絶対に使ってはならない。そのハラールの食品加工場のために山奥の施設を一緒に探した。

さいわい磐田市の山奥の万瀬という集落にある加工所を借りることが決まった。近々、本格稼働の動きが出てきた。大切なのは、集落との交流だ。インドネシアの食事の集いなどを通して人々に受け入れられるようにサポートしてきた体験を話した。

ただ、山奥の施設といえども、行政による補助金で建てられた経緯があり、さまざまな規程のために簡単にはいかない。そのあたりの、行政（国や県や市）とのやりとりの難しさの事例を紹介。

さらには、浜松市の南区で、行われている耕作放棄地を活用した農業での自立支援事業に

ついて、NPO法人市民農業の会の理事長、小楠一氏（80歳）からも報告があった。

今後の山里の過疎化は免れ難い。なにしろ仕事がない。林業も農業もかつての繁栄はみられない。若者は〈まちなか〉に行ってしまう、帰ってこない。

そうしたなか、過疎化の集落に外国人が仕事を伴ってやってくる。あるいは、ケアセンターなど、技能人実習生の流れもある。しかし、日本人の暮らしぶりとは異なる価値観、宗教のあり方について、交流を促進する役割も必要であること。

また、空き家や耕作放棄地は増えてくるので、自分で仕事をつくれる人、インターネットを活用して、全国に発信できる人、有機農業にトライした人、あるいは外国人による技能実習生の流れ、インバウンドツアーなど、いろいろな可能性について言及した。

講演終了後は、食事をしながら、市町の議員同士の交流会がもたれ、情報交換、人間交流など貴重な機会となった。

問い合わせ：特定非営利活動法人 楽舎 053-989-1112 info@raksha.jp.net

浜松北部生きがい特派員 池谷 啓

